

## 論文

# 連作歌曲集「冬の旅」から読む シューベルトとミュラーの生きた時代 —時代を越えた政治的メッセージ—

岡本 時子

## 1. 旅の目的：『冬の旅』からのメッセージ

旅には目的があるのだろうか？そもそも人は何のために旅に出るのか？詩や物語の中で主人公が旅をする時、私たちはその意味を探ろうとする。少なくとも、作者には作中の人物に旅をさせる何らかの意図や目的があると思うからだ。

シューベルトの代表作『冬の旅』でも主人公は旅をする。旅をする経緯ははっきりせず、暗い鬱蒼とした旅だ。にもかかわらず、私たちはこの主人公が気になって仕方がない。わびしい冬のさなかのさすらいというロマン主義の色濃いセッティングからも、その理由は当然ロマン主義という文学的観点から見られることが多いし、旅人がたどる24曲の旅は、人間の実存的な問題をたどる普遍的な心の旅なのだというのが一般的な解釈でもあるので、作品の生まれた時代に目をむけることは多くの場合副次的事項でしかない。本論は、あえて『冬の旅』が生まれた時代の特殊性に目を向け、その時代性のなかからこの作品にこめられたメッセージを読み取ろうとするささやかな試みである。一つの作品がいかに時代によって形作られるものであるかを検証するとともに、文学的視点にのみこだわることなく歴史的・政治的な視点からもこの作品にこめられたメッセージを探ってみたい。

## 2. 作曲家シューベルトと詩人ミュラー

フランツ・ペーター・シューベルト (Franz Peter Schubert) は、1797年にウィーンに生まれ、1828年に同地に没した。ほぼ同時代を生きたベートーヴェンが57歳、モーツァルトが35歳で亡くなったことを見ても、シューベルトの31年という生涯は格段に短いものだったと言えよう。その決して長いとは言えない作曲家としてのキャリアの中

で、彼はおよそ1000にも及ぶ数の作品を残しており、そのなかでも歌曲は600点を超える。歌曲王と称されるゆえんでもあるが、ドイツ・リートに高い芸術性と多様性を生み出し、芸術歌曲〈Kunstlied〉<sup>1)</sup>としてのジャンルを確立したのはまさにシューベルトであった。彼が創り出した流れは、シューマン、ブラームス、ヴォルフへと引き継がれていく。

シューベルトが残したその歌曲作品には『美しい水車小屋の娘』〈Die schöne Müllerin〉と『冬の旅』〈Winterreise〉の2篇の連作歌曲集が含まれている。<sup>2)</sup> 両作品とも後期ロマン派詩人ヴィルヘルム・ミュラー〈Wilhelm Müller〉の詩に付曲したものであり、シューベルトの代表作に数えられる名作である。言うまでもなく芸術歌曲においては、ことは、詩が決定的な役割を持っていた。その点において、シューベルトがミュラーという（一部では二流詩人と評される）人物の詩を2度もとりあげていることは興味深い。

ミュラーが生まれ育ったのは、ウィーンからかなり離れた中部ドイツのデッサウであったが、シューベルトより3年前に生まれ、33歳の誕生日の直前に卒中で亡くなっている。シューベルトが亡くなる1年前のことだった。二人は同じ時代を生きていながらも、生涯顔を合わせることはなかった。ミュラーはベルリンで古典言語学を学び、ギリシャやオリエントに深く傾倒した一方、独文学や英文学にも通じた抒情詩人でもあり、後世の評価はそれほど高くないものの、当時はハイネが絶賛するなど<sup>3)</sup>、同時代の詩人からはそれなりに評価された人物であった。

その最初の詩集『旅する角笛吹き』の遺した紙片からの詩集／第1巻』〈Gedichte aus den hinterlassenen Papieren eines reisenden Waldhornisten〉は1820年に出版されたものであるが、1823年にシューベルトは多少の取捨選択を行い、このうち20曲に付曲した。これが最初の連作歌曲集『美しき水車小屋の娘』である。友人のラントハルティンガーによると、シューベルトはこの詩集を見るなりすっかり心奪われ、あつという間に3曲書き上げたそうであるから、それだけの音楽的啓示を与えるような詩であったことは確かなことであろう。その後シューベルトは年鑑『ウラーニア』<sup>4)</sup>に掲載された12篇のミュラーの詩を見つけ、これにもすぐ付曲し『冬の旅』とした。ところがミュラーは1823年に発表した12篇にさらに12篇を書き加えて、翌1824年に全24篇を『旅する角笛吹き』の遺した紙片からの詩集・第2巻』に収録して出版した。完成させたはずの作品に続

1) 18世紀半ばになりゲーテやシラーらの優れたドイツ語抒情詩が出ると、それに反応して作曲家たちもその芸術性を尊重する音楽性の高い歌曲を作るようになった。それまでの誰にでも気軽に歌える有節形式の歌曲とは区別され、演奏に歌手の力量が必要とされる歌曲のことを言う。

2) 歌曲集『白鳥の歌』が連作歌曲とみなされないのは、シューベルトがこの13曲を連作として作曲したわけではなく、彼の死後出版社のハスリングガーが別々に作曲されたものをまとめて出版したからである。詩がレルシュタープ、ハイネ、ザイドルと3人の手によるものであるのも、そのためである。

3) ハイネは1826年6月7日のミュラーへの手紙で、「私がこれほど愛する詩人は、ゲーテを別にすれば、あなたをおいて他にない」と述べている。(三宅, p311)

4) 詩や文芸作品を集めた年一回刊行される小冊子。歌曲が付録として掲載されることもあった。

編があったことを知ったシューベルトがどんな反応をしたかは知るすべもないが、これにめげることなくシューベルトは1827年秋、すぐに残りの12篇の作曲に取りかかっている。その一年後の1828年11月にチフスにかかったとされるシューベルトは、『冬の旅』の校正をしながら亡くなっていった。シューベルトが『冬の旅』を一度友人仲間に自ら歌ってきかせたものの、誰も第5曲目の『菩提樹』を除いてあまり感心しなかったというのは有名な話である。<sup>5)</sup> それでもシューベルトは「自分は他のどの歌よりもこの連作歌曲が気に入っている」と主張したそうだと。そもそもシューベルトはこの作品を、誰かの依頼で書いたわけではない。渡辺護も、これらの歌曲が「天才が、全く自発的に創作した芸術作品」であり、「いわば自分のために作曲した」<sup>6)</sup>ものであったことが、シューベルトの歌曲の芸術性の高さの理由であると説明している。これだけシューベルトが情熱を傾けて作曲せずにはいられなかったのは、ミュラーの詩にはことばの面でも内容的にも何かシューベルトの心を深く捉えて離さないものがあつたと考えるのが妥当であろう。

その二人を結びつけたものとして、渡辺護は両者に「さすらい」への憧憬があつたと指摘している。<sup>7)</sup> シューベルトは生涯ウィーンをあまり離れず、旅はめったにしなかった。だからこそ、旅に憧れる気持ちも強かったかも知れないし、定職や定宿も持たないボヘミアンだったからこそ精神的には常にさすらいの状態にあり、旅に共感するところが多かったと考える人は他にも多い。その一方でミュラーは生涯精力的に多くの旅をした。そんな彼にとって旅が特別の意味を持っていたであろうことは想像するに難くない。

職人が徒弟修業として遍歴の旅に出るのは、昔ながらのドイツの伝統である。<sup>8)</sup> さらに啓蒙主義時代には、青年が旅をしながら就活の一環としてさまざまな施設や人物を訪れるという修養旅行が行われるようになっていき、旅は教養を高め、視野を広めるものとして積極的な評価を受けていた。ゲーテのヴィルヘルム・マイスターの「遍歴」もまさにこのような旅の一環であつたし、ゲーテ自身もよく旅をしている。

二つの連作歌曲がどちらも「旅」の途中の若者を描いているのは、ドイツの当時の慣行やロマン主義の趣向を考えれば特に珍しいことではないのだろう。しかし先に付曲された『美しき水車小屋の娘』に比べて、『冬の旅』はミステリアスな要素が多く、不可解な問題をはらんでいる。その理由のひとつには、『美しき水車小屋の娘』は遍歴修業中の徒弟職人が、親方の娘に恋をするものの心変わりされ、傷心のあげく入水自殺するというはっきりとした起承転結のある物語であるのに対して、『冬の旅』には明確な話

5) 友人のシュパウンは最初に『冬の旅』全曲を聴いた時の様子を、「われわれは、これらの歌の悲しみに沈んだ、憂鬱な音色にもう口もきけないほど驚いてしまった。」と述べている。(ポストリッジ, p 10)

6) 渡辺, p 64-73

7) 渡辺, p 66

8) ドイツでは放浪大工職人が3年と1日にわたって各地で修業するWalzeという伝統が現在まで800年続いている。

の筋といったものは存在せず、現実と旅人の心の中の境界が極めて曖昧なまま旅が進んでいくことがあげられよう。主人公は眠りにについている恋人を残したまま真夜中に密やかに家を出て、ひとり旅に出る。彼がいかなる人物でどのような経緯があつての行動なのかは、一切明らかにされず。その不明確さゆえに、『冬の旅』はより普遍的な人間の孤独や、実存的な問題を取り上げているのだとも捉えられ、だからこそ不思議な私たちで聴く者の心を捉えて離さない作品になっている。

不可思議な見えにくい部分が多ければ、ますますそこから何かを読み取ろうとするのが人情である。だから『冬の旅』は『美しき水車小屋の娘』より論議的になる。旅人はなぜ旅に出るのか？彼にとって、人間にとって旅とは何なのか？多くの人は『冬の旅』にシューベルトの人生を重ね、不遇な人生、病苦、孤独、死の影などを読みとろうとするだろうが、シューベルト歌いとして名高い歌手であり歴史家でもあるイアン・ボストリッジは、芸術作品は個人の人生体験だけから生み出されるのではなく、人も芸術もそれぞれの時代を背景としながら歴史のなかで生まれていくものであることを主張している。<sup>9)</sup> 以下に『冬の旅』にたどれる二人の生きた時代背景を見ながら、シューベルトがミュラーの『冬の旅』に取り憑かれたように作曲したがったのは、単に個人的な境遇や嗜好だけの問題ではなかったことを検証してみたい。

### 3. シューベルトとミュラーの生きた時代〈1794—1828〉

#### 3.1. ナポレオンの時代

18世紀末から19世紀初頭はヨーロッパでは革命的激動・変革が吹き荒れた時代であった。ヨーロッパ最強と思われていたフランスで王政を覆す革命が起こったのは、大きな衝撃だったのは言うまでもない。従来の特権集団や社会体制が民衆の手で改革されていく姿を、他国は複雑に受けとめていた。革命思想が広まる一方、フランスに対する反発・警戒も強まり、対立が続いた時期でもあった。ナポレオンが登場してフランス革命を収拾させるものの、ヨーロッパ諸国はナポレオンのありがたない支配下に入り、ドイツも多大な影響を受けることになる。木村靖二も「ナポレオンがドイツ近代史においてもった意味は、きわめて大きい」と述べている。<sup>10)</sup>

1791年にフランス革命を認めない立場の神聖ローマ皇帝とプロイセン王は、イギリス・ロシアも巻き込んでフランス相手に数回の戦争を行った。しかし軍事面ではナポレオンが圧倒し、1805年にオーストリア・ロシア軍はアウステルリッツの戦いで敗れ、翌1806年のナポレオンが押しつけたライン同盟の成立によって神聖ローマ帝国は名実ともに消滅、これによりナポレオンのヨーロッパ大陸における覇権が確立する。この敗戦に

9) ボストリッジ, p 76

10) 木村, p 104

よりプロイセンはティルジット条約で領土の半分を失い、多額の賠償金を抱え国家の大危機を迎えた。オーストリアも戦争による荒廃は激しく、1810年までにロンドン、パリに次いでヨーロッパ第3の大都市だったウィーンは約2割人口減、40%のインフレを経験し、1811年には国家破産の憂き目に遭っている。皇帝フランツ2世の皇女マリー・ルイーゼが講和条件の一環でナポレオンに輿入れしたのもこの時期である。

大陸封鎖令をめぐりナポレオンとロシアの対立は深まり、ついにナポレオンは1812年の夏、大陸軍を率いてロシアに侵入した。戦いを巧妙にかわすロシア軍相手に苦戦し、ナポレオン軍は冬を迎え撤退を余儀なくされる。極寒の地での長い敗走のなか食料供給も断たれ、このロシア撤退はヨーロッパの軍事史上の大悲劇とされている。60万の兵力を誇った大陸軍はロシアの冬の野に壊滅し、帰還できたのは全体のわずかに6分の1の10万人だったという。このナポレオン軍は被征服地から召集した多国籍軍で、その3分の1はドイツ人であった（ライン同盟軍兵13万、プロイセン兵2万、オーストリア兵3万）ため、多くのドイツ兵がロシアから撤退する際、命をかけた「冬の旅」を経験することになる。シューベルトの時代にも「冬の旅」とはその理不尽なで過酷な冬の行軍を思い出させる、実在感のあるものだったのである。

両方の足の裏が燃えるように熱い  
踏みつけているのは氷と雪なのに  
ひと息つくのはもうよそう  
町の塔が見えなくなるまでは （第8曲『かえりみ』）

ここに見えるのは、まさに無意味な戦争に駆り出されて雪と氷の野原を絶望しながら撤退する兵士たちの姿である。ひと息ついてしまったら、もう二度と歩けなくなるのではないかと怖れながら、心をもたずに進んでいくしかない極限の旅を強要されている兵士たちの姿である。3万3千のバイエルン軍では、帰還できたのは3千だけという悲惨さだったそうだ。

窓辺の葉よ、いつになったらおまえたちは緑になるのだろう  
いつになったら私はこの腕に愛する人を抱きしめることができるのだろう？  
（第11曲『春の夢』）

春を夢見るのは、春が到来するかどうかかわからないからこそであろう。真っ白の雪だらけのロシアの野に兵士たちが夢見るのは、いつ帰れるかわからない故郷の緑豊かな春であったにちがいない。「いつになったらできるのだろう？」は悲痛な問いかけとも、諦めの反語とも読むことができるだろう。

ナポレオン支配に反感を感じる層のなかから、領邦国家を越えた新しい種類の「ドイツ」ナショナリズムが生まれ、反ナポレオン運動へと結びついていく。<sup>11)</sup> フィヒテの講演「ドイツ国民に告ぐ」はそのような愛国心に訴えたものとして有名であるが、1808年にはベルリンでハインリヒ・フォン・クライストがナポレオンに対するドイツの民族蜂起をうながし、1809年にはフリードリヒ・シュレーゲルがオーストリアで同様の決起を促している。1813年にロシアと同盟したプロイセンはまさに国の命運をかけてナポレオンに宣戦布告したが、当時反ナポレオン旋風の吹くベルリン大学の学生であったミュラーも義勇兵に志願し戦っている。ナポレオン支配打倒のためのこの戦争は解放戦争〈Befreiungs-Krieg〉として知られているが、最終的にはプロイセン・スウェーデン・オーストリア・ロシア・イギリス、バイエルン、ヴュルテンベルク、バーデンがナポレオン軍と戦った。1813年10月に同盟軍はナポレオン軍をライプツィヒに包囲し陥落させる。この3日間にわたる戦いは解放戦争最大の会戦で「諸国民戦争」〈Völkerschlacht bei Leipzig〉とも呼ばれる。この時ドイツ国民意識はかつてないほどに高まり、プロイセンでは17人に1人という驚くべき高い割合で戦争に参加していた。ナポレオンはパリに敗走し、これによってライン以東のドイツが解放され、フランスの圧力が取り除かれることになった。ミュラーの青年時代はまさにこのような激動の中、新たに芽生えつつあるナショナリズムのもと、新たな政治体制や社会制度に対する期待も芽生え始めた時代であったと言える。事実1814年から15年はそのような春の時代であったが、すぐにその期待は頓挫し、時代は「冬」の時代に逆行していくことになる。このようなところにも「冬」の旅への象徴的意味が窺える。

### 3.2. メッテルニヒの時代

ミュラーの参戦の事実や、シューベルトが1814年にオーストリア軍がパリに侵攻した際『パリにおけるヨーロッパの解放者たち』〈Die Befreier Europas in Paris〉という曲を作っている事実からも、二人が政治的に同じ方向を向いていたらしいことが窺われよう。しかしナポレオンの大陸支配が崩壊しフランスの圧力が去っても、ミュラーやシューベルトが望む社会は現れなかった。ナポレオン後の新しい国際秩序と戦後処理のために列国は1814年9月にウィーンに集まって会議を開いた。「会議は踊れども進まず」と揶揄され、翌年6月まで続いたウィーン会議である。議長は当時オーストリア外相であったメッテルニヒであったが、彼は強力な覇権を持つ国家の出現を抑えようと、外交的手腕を発揮して分割統治政策を推し進めた。その結果成立したのは、オーストリアを盟主とする35の君主国と4自由都市からなる「ドイツ連邦」というゆるい諸邦国連

11) ナポレオンが自らの戦争を正当化するために用いた市民的自由とか国民を軸とした政治という考え方が、支配下に収めた各国からは逆にフランス支配の対抗馬の論理として使われるようになったのは皮肉な結果だったと、福井は述べている。(p 85-86)



合体であり、ミュラーやシューベルトを含む多くのブルジョワ市民が望むような強い統一国民国家は実現しなかった。加えてメッテルニヒは、革命を防止し平和を維持すべく各国の自由主義とナショナリズムを徹底的に抑圧する政策にもうって出た。解放戦争の大きな力となったのは、ドイツのブルジョワ市民層、青年、知識人であったが、彼らは自由主義を信奉し、国家統一を望んでいた。議会を持つ立憲君主政を望み、言論・出版・信教の自由を望んでいたのに、ウィーン体制によって彼らの期待は大きく裏切られることになったのである。

19世紀半ばまでヨーロッパではウィーン体制のもと、大きな戦争は回避されていたものの、表面下では激しい政治的・社会的運動に揺れた時代でもあった。対ナポレオン戦争に志願兵として希望を胸に参戦し帰還した学生たちを待っていたのは、ウィーン体制という反動体制であった。失望した学生たちであったが、学生結社を結成し対抗する。ドイツ統一運動は継続された。1815年にイエナで最初の学生組合ブルシェンシャフトが結成されて、運動はまたたくまにドイツの各大学に広まって行った。1817年の宗教改革300年を記念するヴァルトブルクの集会がこのような学生運動のピークであったが、この時起こった焚書騒ぎで、各国君主とメッテルニヒは警戒心を強めた。これに続き、1819年に過激派学生カール・ザントが、ロシアのスパイと目されていた外交官でもあり通俗作家でもあったコッツェブーを暗殺したのをきっかけに、カールスバートの決議が発効される。これによりブルシェンシャフトは禁止され、検閲と扇動者の取り締まりは強化されて、ドイツの自由と統一の動きは徹底的に抑圧されることになる。メッテルニヒの完全勝利のもと、ドイツは「冬の時代」に突入する。

シューベルトもミュラーもまさにこのような息苦しい時代に生きていたのだった。ウィーン会議後、検閲制度やデマゴグ狩は厳しさを増し、多くの芸術家を悩ませる。鎖国政策で外国旅行は制限され、公安警察が政治犯と思想犯を取り締まり、巷には衆人を監視するスパイもいた。あらゆる社会的集まりに嫌疑がかけられ、1820年に友人ヨハン・ゼンが警察に逮捕された際<sup>12)</sup>、シューベルトも懲戒を受けている。検閲制度は印刷物の文言のみならずチラシから催し物の上演時間に至るまで細部に及び、友人の劇作家であったバウエルンフェルトやグリルパルツアーたちはもちろん、音楽家のシューベルトをも大いに悩ませた。彼のオペラの台本やリートに歌詞が自由主義の傾向があるとしてしばしば取り調べの対象になったからである。オペラ『陰謀者たち』(Die Verschworenen)はタイトルが悪いと『家庭争議』(Der häusliche Krieg)に改題され、『グライヒェン伯爵』(Der Graf von Gleichen)は貴族批判だとして上演禁止、オラトリオ『ラザロ』(Lazarus)は題材が聖書であるとして<sup>13)</sup>台本が許可ならず未完のまま

12) 学生政治活動家だったゼンは逮捕の後、14か月勾留、その後ティロルに国外追放になった。シューベルトは詩人であったゼンの詩2篇に付曲している。

13) 過度な宗教への傾倒も警戒され、検閲の対象であった。

になってしまった。

一方ミュラーもベルリンで大学生だった頃、友人たちと一緒に出した『同志の華』(Bundesblüten)という詩集に収めた詩のなかに「神と自由のために」というくだりがあるとして削除を指示されているし、その後も彼は検閲官と衝突を繰り返している。過激と目されたバイロンの伝記のミュラーによる翻訳を載せているとして、1822年版『ウラニア』が発禁になってしまったこともあった。

言論・表現の自由がおびただしく制限される社会に生きる二人が、自由な社会を夢見、自由主義運動を支持していたのは明らかである。そんなミュラーが検察官の目をくすねるようにして、投げたメッセージがある。第10曲目『休息』で旅人は

炭焼きの狭い小屋に  
一夜の宿を見つけた

のだった。何気なく読み飛ばしてしまいそうな箇所だが、ボストリッジはこの「炭焼きの狭い小屋」には大きなメッセージが隠されていると主張する。「炭焼き」とはイタリアの秘密結社「カルボナリ」(炭焼き党)を指し、ミュラーはこれを詩に入れることで遠回しに彼らの運動を賛美していたと言うのだ。<sup>14)</sup> カルボナリは1809年に南イタリアで結成された秘密組織で、1816年には6万の党員を擁するイタリア最大の地下組織であった。山の中の集会所を炭焼き小屋に見せかけ、党員も賤業とされていた炭焼きをよそおうことで現存体制への抵抗を示した。<sup>15)</sup> カルボナリの運動はウィーン体制に反対するヨーロッパ自由主義運動の中心組織として国際的にも支持される存在であった。ミュラーとシューベルトにとっては、自分たちはがんじがらめで何もできない状態であったからこそ、代わりに彼らの抵抗運動を応援したい気持ちが一層強かったのだろう。暗号のようにミュラーが込めたメッセージにシューベルトは気づいたからこそ、そこに自分も共感したからこそ、彼はミュラーの詩にこだわって作曲したのではないだろうか？少なくともそれが『冬の旅』作曲の動機の一つであったのは確かなことであると思える。絶望的な「静穏の20年代」にドイツの自由主義者に残されていたのは外国の革命に期待することだった。それは二人に共通した認識であったのだろう。

しかし思想統制をめぐるメッテルニヒとの戦いは、二人が亡くなった後も続く。文学者グループ「青年ドイツ派」の著作が発禁となり、ハイネはドイツの反動的現状を厳しく批判した。反動ドイツを痛烈に風刺・批判した『ドイツ・冬物語』のタイトルに使われた「冬」ということばにミュラーと同じ状況への言及と抗議が読みとれよう。

14) ボストリッジ, p201

15) カルボナリは1820年ナポリ革命を成功させ、革命政権を樹立、両シチリア王国にも憲法制定を認めさせるなどそれなりの成果を収めたが、31年にはオーストリア軍の介入で制圧される。



### 3.3. ビーダーマイヤー時代

1815年から1848年までの時代は「三月前期」〈Vormärz〉と称される反動の時代であったが、これと同じ時期は別の観点からビーダーマイヤー〈Biedermeier〉時代ともよばれる時代でもあった。ウィーン体制のもと、思想的な自由主義運動は弾圧されたが、経済的な自由主義政策は推進されて社会では経済力を持った市民社会が台頭した。主に官僚を中心とした教養のあるエリート市民層であったが、旧態依然とした政情が変わらない現実に失望した人々は、政治や国際情勢に背を向けるようになっていった。多くの人が内向きになり、平凡な日常生活の中でささやかな幸せを見つけることを選択した結果、非政治的で小市民的傾向の強い生活様式が出現した。ビーダーマイヤーとは、もとはその事なかれ主義を揶揄して戯画からとった蔑称であったが、教養と経済力を身につけた市民層が芸術を愛好するようになり、侮れないウィーンの新しい精神文化を形成していったのだった。文化の担い手は従来の宮廷・教会・貴族から市民層に移っていったため、音楽もかつての宮廷音楽から、コンサートホールでの公開演奏や、市民の邸宅に仲間が集まるサロン形式の私的な音楽会へとシフトし、新しい形で愛好されるようになった時代でもある。

サロン音楽会は格式のある貴族のサロンや裕福なユダヤ人銀行家のサロンのものもあったが、中産階級が少人数で気どらない娯楽的な集まりとして行うことも多かった。ゲームなどもさかんに行われ、芸術全般をテーマとした交友の場であったようだが、中心となるのは音楽であった。当時ピアノが改善され広く普及し、ピアノを囲み手軽に音楽を楽しめるようになったのも一因である。ウィーンはこの時代、音楽では高い芸術的水準を誇っていたが、音楽は芸術家だけのものではなかった。1820年代、中産階級の人々はピアノを買い、音楽のレッスンを受け、楽譜を購入するだけの経済力を持っていた。そのため家庭においても広く音楽が楽しまれ、その点でもウィーンはまさに「音楽の街」であった。

シューベルトが音楽家として生きていたのは、まさにそのような市民が教養や芸術や娯楽に目をむけたビーダーマイヤーの時代であった。シューベルトは不遇・不運の作曲家と見なされがちだが、そのように知己が集まって音楽を楽しむ時代の住人だったからこそ、どの作曲家にも負けずシューベルトには友人という恵まれた宝物があった。住まいらしいものをほとんど持たなかったシューベルトは、体調が悪い時に実家や兄のところにやっかいになっていたのを除けば常にあちこちの友人のところに寄宿していた。結婚はしなかったが、シューベルトは常に良き友人に囲まれ、その友人たちとコーヒーハウスや居酒屋をはしごし、大いに交友を楽しみ、信頼と愛情を寄せられた存在であった。シュパウンをはじめとする何人かの友人が、「シューベルティアーズ」と名付けられた、シューベルトを中心とする友人たちの気のおけない集いをよく開いたのはよく知られている。画家や詩人、音楽家や芸術愛好家が集まり、そこでシューベルトは音楽を演奏し、

作品を発表した。そのような環境が数多くの歌曲も生まれる下地になったわけだが、作品には友人の詩に作曲したものや、知人に献呈されたものが多く含まれていたのは自然な成り行きだった。会の途中からダンスが始まり、ダンス音楽の演奏を依頼されることもよくあったらしい。そうして生まれた独奏ピアノ用のワルツ、レントラー、エコセーズなどの舞曲はかなりの数に上る。このような環境で生まれたシューベルトの音楽は中産階級的性格を持ったもので、貴族のサロンに出入りして中産階級の音楽に接点を持たなかったベートーヴェンのものとは大きく異なることをハンソンが指摘している。<sup>16)</sup>

しかし、精神の自由を諦め反動体制に背を向け、居心地がよく安全な日常生活に浸りきっているビーダーマイヤーをシューベルトもミュラーも決して、肯定していたわけではなかった。第17曲『村で』には、安易な生き方に安住するブルジョワ層に対する鋭い批判が浮かび上がってくる。

犬たちは吠え、鎖がきしむ  
 村人たちは寢床でまどろみ  
 自分にはないあまたのものを夢見ては  
 よくも悪くも心をなぐさめる  
 しかし朝になればすべては消えている  
 そうであっても皆それなりに楽しみはした  
 そして夢のなかに残してきたものを  
 枕の上にまた見つけようと思うのだ

眠らぬ犬たちよ、吠えてわたしを追い払うがいい  
 眠りのときもわたしを休ませるな  
 すべての夢は見つくした  
 眠りを貪る者どものなかにどうしてこれ以上とどまろうか？

梅津時比古は、この詩が『冬の旅』全体の中で一番強く体制批判をしていると指摘している。<sup>17)</sup> 見知らぬ村で行き場のない旅人が、安穏と寢床で小市民的な夢をみている村人たちに向ける侮蔑と非難は、とりもなおさずシューベルトとミュラーがウィーンやデッサウの一般市民にも向けたものでもあると見なせる。最終的にそのまなざしはビーダーマイヤー社会で圧政に抵抗することなく友人たちとの交友や娯楽に興じている自分自身にも向けられている批判でもあると、梅津は主張する。そしてそのような批判の中には、夢の中でしか希望を見いだせない一般庶民への一抹の憐憫も存在する。

16) ハンソン, p 167.

17) 梅津, p 279-281

### 3.4. ロマン主義の時代

福井憲彦は、19世紀を通して時代の底流をなす考え方、感性はロマン主義であったと述べている。<sup>18)</sup> 理性を掲げる啓蒙思想のもと、フランス革命やナポレオン戦争が行き着いたのは恐怖政治や戦争荒廃であった。人間精神の内面や感情を尊ぶロマン主義が、19世紀の政治理想になり革命運動の指導原理となったのは、啓蒙主義への反動でもあった。個人の感情や個性、自由な自己表現、想像力を重んじ、歴史や民族の伝統を尊重したのが、ロマン主義である。これが解放戦争時の国民意識の高まりや、ウィーン体制後の反動抵抗運動の底流をなすものであり、シューベルトとミュラーもまさにその時代の申し子であった。

文学におけるロマン主義は、イギリスとドイツが他のヨーロッパ諸国に先んじていた。なかでも自国を越えてヨーロッパ大陸で大きな影響を与えたのがバイロンであった。バイロンはオスマン帝国から独立を目指すギリシャの独立運動を支援し、義勇軍として戦いに参加すべくギリシャに渡ったことでも有名である。戦う間もなく数か月後熱病であっけなく病死してしまったのに英雄視されるのは、抑圧に逆らう行動に出た勇氣と情報ゆえのことであった。当時ヨーロッパにはバイロン崇拜が吹き荒れ、ロシアの詩人プーシキンをはじめ、ミュラーも崇拜者の一人であった。彼はバイロンに関する論文を書いただけでなく、バイロンの伝記を独訳し検閲と衝突している。だからミュラーの詩にバイロンの手法が発揮されても驚くべきことではない。先に述べたように『冬の旅』はミステリーだらけだ。物語やドラマの結末は最後になってもわからない。旅人の悲しみや苦しみを私たちは感じることもできても、彼が誰なのかはわからないのだ。このはっきりと明かされることのない主人公の正体こそ、バイロンの手法だとボストリッジは指摘する。<sup>19)</sup> バイロンはわざと作中のヒーローをミステリーのオーラで包み込み、情報を出し惜しみすることで、読者の心を惹きつける名人であった。それと同じ手法がミュラーの詩にも用いられているゆえに、「わからないからこそ、私たちは自分自身の人生から事実を探し出そうとし、主人公に自分の姿を映し出すのである」と、ボストリッジは指摘する。<sup>20)</sup>

ちなみに、バイロンの影響故か、大学で学んだ古典言語学故か、ミュラーとギリシャのかかわりも深い。ミュラーはフォン・ザック男爵との1817年のギリシャへの調査旅行が頓挫して、ついに現地を訪れることはなかったが、<sup>21)</sup> 1821年にギリシャ独立を支持する『ギリシャ人の歌』を発表し「ギリシャ人ミュラー」と呼ばれた。

統一が実現していないドイツで、国民意識を育てるには共通の言語文化が大きな役

18) 福井, p 181

19) ボストリッジ, p 26-28

20) ボストリッジ, p 28

21) フォン・ザック男爵を団長とする学術調査旅行をするにあたって顧問として参加すべく出発したものの、ペスト発生のため予定が変わり、代わりに数か月イタリアに滞在した。

割を演じた。言語学者グリム兄弟の民話収集に代表されるように、ドイツ民族の言語文化を歴史的に把握しようとする試みもロマン主義を反映したもので、一種の文化的ナショナリズムであると言えよう。『冬の旅』が含まれたミュラーの『旅する角笛吹きの遺した紙片からの詩集』は、親交のあったハイデルベルク・ロマン派のブレンターノとフォン・アルニムによる民謡集『少年の不思議な角笛』に影響を受けたものであるのは、「角笛」ということばやイメージからも明らかである。

ロマン主義が浸透するのは、詩と音楽では時間的にずれがある。文学においての方が早く、18世紀後半から19世紀前半であったのに対して、ロマン派音楽はそれよりも遅れ19世紀半ば近くに広まったため、シューベルトをロマン派とするかどうかは微妙なところである。渡辺護はシューベルトが生きたのは「古典派からロマン派への過渡期であり、その移行のダイナミズムの中から彼の音楽は生まれた」と言っている。<sup>22)</sup> つまりミュラーの詩はロマン主義の範疇に入るが、シューベルトの音楽は古典派音楽との橋渡しをするロマン派の先駆的存在であったと言えよう。

『冬の旅』で一番有名な歌はおそらく5曲目の『菩提樹』ではないだろうか。ここには、ロマン主義的なモチーフや要素が随所に認められる。

門辺の泉のほとり  
そこにたたずむ一本の菩提樹  
その木陰で私は夢を見た  
あまたの甘い夢を

城壁に囲まれた中世の面影残るドイツの町でよく見かける噴水井戸と大きな菩提樹という風景は、多くのドイツ人にとっては郷愁を呼び起こすものであり、中世に遡った民族の歴史を思い出させるものである。菩提樹は榎の木と並んでドイツ人の精神史のなかでも特別な意味をもつ樹木である。自然崇拝の多神教であったゲルマン民族にとっては泉や巨木も崇拝の対象であった。菩提樹はゲルマン人にとっては神聖な木で、この木の下で裁判が行われていたことが知られている。まさにドイツを象徴する存在であるこの木が登場するのは、ロマン主義の「過去への回帰」を促し、ゲルマン民族の伝統のなかにドイツ国民としてのアイデンティティを見いだそうとする行為であると見なすことができる。

さらに菩提樹は、中世のミンネジンガーであったヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデの恋愛歌<sup>23)</sup>にも歌われているように、「愛の樹木」として男女の逢引の場

22) 渡辺, p.70

23) 12世紀後半から13世紀初頭に書かれた「菩提樹の下／あの草原はわたしたちふたりの寝床があったところ」で始まる中世騎士道的恋愛詩。

でもあった。旅人はかつて菩提樹のもとで愛をはぐくんだことがあったのだろう。愛の思い出と菩提樹は密接に結びつき、「追憶」というロマン主義のモチーフを体現する。

私はその幹にきざみつけた  
あまたの愛のことばを

菩提樹は旅人の心の拠りどころであり、庇護者であるようだ。

すると枝がざわざわとそよぐ  
まるで私をいざなうかのように  
「私のところに来るがいい、友よ  
ここに君の安らぎがある」と

一見この一節は、旅に疲れた旅人を菩提樹が労わって、いつでも自分のところに戻って来い、いつでもここに君の居場所がある、と語りかけているようだが、冬の戸外で菩提樹の木の下で得られる「安らぎ」とは凍死を意味していて、菩提樹は旅人を死にいざなっているのだとも読める。死＝安らぎというたとえには、明らかにロマン主義の「死への憧れ」が読み取れる。ミュラーの手による『美しい水車小屋の娘』も最後は徒弟の青年の死で終わる。シューベルトの作品をとっても、ゲーテのバラードに付曲した『魔王』や弦楽四重奏曲『死と乙女』などにも死は顕著なモチーフであり、この傾向は後にヴァーグナーの『トリスタンとイゾルデ』にも受け継がれ、昇華されていく。

いまや私ははるか  
かの地から遠く離れたところにいる  
それでもなお木がざわめいて語りかけるのが聞こえるのだ  
「あの木陰に君の安らぎがあるのに」と

ロマン主義のキーワードの一つが「距離・隔たり」だ。距離は時間軸にとれば過去への回帰になるが、もちろん空間的距離のこともある。はるか遠くの地にいて容易に帰れない状況があるからこそ、過去を懐かしく愛しむことができ、過去はいっそう人の意識の中で美しさを増すのであろう。この距離感ゆえに「旅」は特別な意味を持つ。その意味で『冬の旅』は間違いなくロマン主義の産物であると言える。



### 3.5. 近代工業化幕開けの時代

ロマン主義はまた自然をことのほか賛美するものであり、人と自然のかかわりもその重要なテーマであった。『冬の旅』の旅人は、冬の厳しい自然のなかを「獣道を捜し」「雪の大地」を涙しながら旅していく。そして気がつくと鬼火にさそわれて岩山の深い谷間に迷い込み（第9曲）、森で見つけた炭焼き小屋の窓辺に氷の花を見つけ（第11曲）、一夜で自分の髪が白髪化したかのような幻視体験をし（第14曲）、不気味なカラスにまとりつかれ（第15曲）、空に3つの太陽を仰ぐ（第23曲）。これらすべてが幻想と神秘につつまれたロマン主義の香りを伝える一方で、現代人にはひどく迷信めいていて、非科学的な印象を与える。

しかしロマン主義の自然崇拜は、自然への関心も喚起するものである。1802年のノヴァーリスによる『青い花』や、1819年のE.T.A・ホフマンの『ファールンの鉱山』など、ロマン派の小説には地下鉱山が舞台となるものがある。幻想的で怪奇的な雰囲気であるが、この時代、鉱山開発は国の経済産業の一大関心事であり、一般の関心も高かったからこそ物語や小説の舞台として取り上げられたと見なすこともできよう。事実、ヴァイマルでゲーテは鉱山開発大臣を務めていたこともある。さらにそのゲーテを例にとるならば、彼は文学者であるのと同時にすぐれた自然科学者でもあった。つまりこの時代は自然科学に人々の関心が集まった時代であり、それはロマン主義とは矛盾しないものであったのだ。

鬼火や幻日などをただの怪奇現象として見なすのではなく、科学的解明や説明を求める時代であったからこそ、人々の話題にものぼり、ミュラーの詩のなかにも取り入れられているのだと考えられる。旅人が一夜を過ごした小屋の窓辺に見た「氷の花」も18世紀には哲学でよく問題とされたが<sup>24)</sup>、これも当時自然現象に並々ならぬ関心が寄せられた結果であろう。

ドイツの自然科学はこの時代、数学者ガウスや地球科学者とも言うべきアレクサンダー・フォン・フンボルトらを先駆として躍進しようとしていた段階にあり、工業化への準備段階とも言える時期にあった。19世紀初頭までドイツは総人口の90%が農村に居住する農業国で、工業化、産業化はイギリスなどに比べると大きく水をあけられていた。ドイツで本格的な産業革命が起きるのが1850年代、鉄道開通が1830年代であったから、その直前に作られた『冬の旅』の時代には、もう既に来るべき工業化・産業化の兆しは十分に見えていたはずである。

工業化を推し進めるには、市場を確保し、輸送用の交通網を整備し、情報手段を改善することが先決である。その点で見過ごすことができないのが、鉄道敷設以前に郵便制度が果たした役割である。第13曲には郵便馬車が登場する。馬車はポストホルンと呼ば

24) カントの『視霊者の夢』（1766）やショーペンハウアーの『意志と表象としての世界』（1819）などで議論されているほか、ゲーテの書簡にも言及がある。

れる角笛の形のラッパを鳴らしながら旅人の傍らを通り過ぎて行く。角笛にはヨーロッパの歴史の中で蓄積されたさまざまな意味が込められており、その響きそのものが遠い過去の記憶をよび覚ますものである。現代の私たちから見ると、旅人の遭遇する馬車と角笛は古き良き昔の時代を思わせるロマンチックな情景に他ならない。しかしその当時、郵便は近代化・産業化を推し進めるのになくはならない輸送手段・情報手段であり、当時の人たちには郷愁を誘うものでもロマンチックなものでもなかったことを忘れてはならない。郵便馬車が運ぶのは郵便物だけではない。乗り合い馬車でもあったため、多くの人が利用する実用的な交通手段でもあった。郵便馬車は競って迅速で正確な運行を目指した。その結果、自動車や鉄道がなかった1820年代の人々にとって郵便馬車は当時最速の乗物、輸送手段であったのだ。したがって、旅人が目にした馬車は私たちがイメージするようなんびりと牧歌的な移動手段ではなく、能率・効率を容赦なく追及する近代化の先端を行く乗物であった。道路を疾走する馬車を、徒歩で旅する旅人はどんな気持ちで眺めたのであろうか。私たちが時速200キロを超えて走る新幹線を驚嘆の気持ちで眺めるのにも似ていたのではなかろうか。

通りから郵便馬車の鳴らすラッパが響く<sup>25)</sup>

何があるのだろう、こんなに心が高鳴るのは  
私の心よ？

旅人の心が高鳴るのは、郵便馬車が恋人や恋人の住む町を思いださせ、自分宛の手紙を期待させるからだけではなく、行先もわからない未来に突進する高速乗物に一瞬心がときめいたからではないか。ロマン主義者であろうとなかろうと、私たちは過去に戻ることも、過去に住むこともできない。未来にのみ希望はある。過去を引きずってあてどない旅を続ける旅人に、ひょっとしたらこの郵便馬車は、一瞬、未来という漠然とした希望を与えてくれたのかもしれない。だからこそ、来るはずもない恋人からの手紙が脳裏をよぎったのではないだろうか。

それと同時に、ここにはどんどん進む技術革新の前に戸惑い、疎外感をつのらせている旅人の姿も容易に想像できる。新しい市民社会・来るべき産業化時代の行く末への強い危惧感は最後の曲（第24曲）に、もっと明確に表れる。ここで登場するのは、凍てつく中裸足で手廻しオルガンを鳴らす老いた辻音楽師だ。この哀れな老人の姿に込められているのは、人を社会の隅に追いやり無関心でいる社会の非情さに対する抗議であるともとれよう。そして、最後に旅人は老人に話しかける。

25) 先に述べた啓蒙時代にさかんになった修養の旅が可能になったのも、郵便馬車が交通機関として整備され、安全な旅ができることが一因であったし、そのような旅による移動が人々の間に情報ネットワークをもたらした。(池上, p104)

おまえといっしょに私もいこうか？

私の歌にあわせておまえのライアーをまわしてもらおうか？

これが大きなメッセージでなくて何であろうか？

#### 4. ミュラーとシューベルトが現代の私たちに語りかけるもの

ミュラーもシューベルトもわずか30余年の人生であったが、これまで見たように、彼らが生きた時代とはナポレオン支配と解放戦争によって盛り上がった自由主義とナショナリズムが、メッテルニヒによるウィーン体制によって碎かれ、その失望が政治に背を向け小市民的生活に安住するビーダーマイヤー時代を生み出した時代であった。自由主義とナショナリズムの底流になっていたのがロマン主義であり、この時代の方向と価値観を定めていた。芸術とは個人の自己表現でありながら、時代によって生み出されるものである。『冬の旅』という一作品をとってみても例外ではない。このなかには時代の特殊性を反映した要素が数多く読み取れる。特に『冬の旅』ではあちこちにこめられた政治的・社会的メッセージは顕著であり、これが二人の創作の大きな動機になっているのではないかと思えるほどだ。厳しい監視のもと、言いたいことも自由に言えない社会で、密やかに抗議のメッセージを詩や音楽というかたちで発信しなくてはならなかったミュラーとシューベルトであったが、皮肉にも二人を苦しめたメッテルニヒの反動体制があったからこそ『冬の旅』は生まれたのであり、だからこそ時代あつての作品だと言える。しかし、これを私たちは過ぎ去った時代のことと簡単に片づけることができるだろうか？今の時代にも言論統制が平然と行われている国は多々あるし、日本にもないとは言いきれない。だからこそ、今の時代でも『冬の旅』で発せられている政治的メッセージは意味を失っていない。『冬の旅』はロマン主義という文学的観点からだけ解釈されるべき作品でないことをもう一度強調しておきたい。

#### 参考文献

- 青島広志『シューベルトとウィーンの音楽家たち』学習研究社、2008年。
- ボストリッジ、イアン『シューベルトの「冬の旅」』（岡本時子、岡本順治訳）アルテスパブリッシング、2017年。
- Budde, Elmar : *Schuberts Liederzyklen: Ein musikalischer Werkführer*. München: C. H. Beck, 2003.
- Dieckmann, Friedrich : *Franz Schubert : Eine Annäherung*. Frankfurt a.M. : Insel Verlag, 1996.
- フィッシャー＝ディースカウ、ディートリヒ『シューベルトの歌曲をたどって』（原田茂生訳）白水社。
- 福井憲彦『近代ヨーロッパ史』放送大学、2005年。

- ヒンリヒセン, ハンス=ヨアヒム『フランツ・シューベルト あるリアリストの音楽的肖像』  
(堀 朋平訳) アルテスパブリッシング, 2017年。
- 池上俊一『森と山と川でたどるドイツ史』岩波書店, 2015年。
- 石多正男『歌曲と絵画で学ぶ ドイツ文化史 — 中世・ルネサンスから現代まで』慶應義塾  
大学出版会, 2014年。
- 岩井宏之『前期ロマン派の音楽 シューベルトからリストまで』音楽之友社, 1999年。
- 喜多尾道冬『シューベルト』朝日新聞社, 1997年。
- 木村靖二『ドイツの歴史』有斐閣, 2000年。
- コーン, ハンス『ハプスブルク帝国史入門』(稲野 強 他訳) 恒文社, 1982年。
- 前田昭雄『フランツ・シューベルト』春秋社, 2004年。
- 三宅幸夫『菩提樹はさざめく』春秋社, 2004年。
- 村田千尋『作曲家◎人と作品 シューベルト』音楽之友社, 2004年。
- 音楽之友社(編)『シューベルト』(作曲家別名曲解説ライブラリー 17) 音楽之友社, 1994年。
- オズボーン, チャールズ『シューベルトとウィーン』(岡美知子訳) 音楽之友社, 1995年。
- Pablé, Elisabeth : *Das kleine Schubert-Buch*. Hamburg: Rowohlt, 1980.
- 坂井栄八郎 他『世界歴史体系 ドイツ史 2 — 1648年～1890年 —』山川出版, 1996年。
- テイラー, A. J. P.『ハプスブルク帝国 1809～1918年』(倉口 稔訳) 筑摩書房, 1987年。
- 梅津時比古『冬の旅 24の象徴の森へ』東京書籍, 2007年。
- 渡辺護『ドイツ歌曲の歴史』音楽之友社, 1997年。
- Whittall, Arnold : *Romantic music: A concise history from Schubert to Sibelius*. London:  
Thames and Hudson, 1987.

## 参考資料：連作歌曲集『冬の旅』(Winterreise) 原文及び筆者による全訳

## 1. Gute Nacht

## おやすみ

Fremd bin ich eingezogen  
 Fremd zieh' ich wieder aus.  
 Der Mai war mir gewogen  
 Mit manchem Blumenstrauß  
 Das Mädchen sprach von Liebe,  
 Die Mutter gar von Eh' —  
 Nun ist die Welt so trübe,  
 Der Weg gehüllt in Schnee.

よそ者として私はここに来て  
 よそ者としてまたここを立ち去る  
 かつて五月は私をやさしく迎えてくれた  
 あまたの花束とともに  
 娘は愛を語り  
 その母は結婚の話さえした  
 なんのにいま世界はこんなにもうら悲しく  
 道は雪に覆われている

Ich kann zu meiner Reisen  
 Nicht wählen mit der Zeit:  
 Muß selbst den Weg mir weisen  
 In dieser Dunkelheit.  
 Es zieht ein Mondenschatten  
 Als mein Gafährte mit,  
 Und auf den weißen Matten  
 Such' ich des Wildes Tritt.

私には旅立つ時を  
 選ぶことはできず  
 みずから道を探さなくてはならない  
 この暗闇のなかで  
 月の光が照らす影法師だけが  
 旅の道連れとしてついてくる  
 そしてこれから白い雪野原に  
 けものみち  
 獣道を探して行くのだ

Was soll ich länger weilen,  
 Daß man mich trieb' hinaus?  
 Laß irre Hunde heulen  
 Vor ihres Herren Haus!  
 Die Liebe liebt das Wandern, —  
 Gott hat sie so gemacht —  
 Von einem zu dem Andern,  
 Fein Liebchen, gute Nacht!

何をこれ以上ここにとどまろうか  
 追い立てられないうちに行くのだ  
 狂った犬どもよ、吠えるがいい  
 飼い主の家の前で  
 愛はさすらいを好むもの  
 それは神さまの定めたまいしこと  
 この人からあの人へと  
 いとしい人よ、おやすみ

Will dich im Traum nicht stören,  
 Wär' schad' um deine Ruh',  
 Sollst meinen Tritt nicht hören—  
 Sacht, sacht die Türe zu!

君の夢を<sup>さまた</sup>妨げないよう  
 君の眠りがそこなわれないよう  
 私の足音も耳に入らぬよう  
 静かに、静かに扉を閉めよう



Schreib' im Vorübergehen  
An's Tor dir gute Nacht,  
Damit du mögest sehen,  
An dich hab' ich gedacht.

通りすがりに、君宛てに書いておこう  
「おやすみ」と、入口に  
あとから君にわかるように  
私が君を想っていたと

## 2. Die Wetterfahne

## 風 見

Der Wind spielt mit der Wetterfahne  
Auf meines schönen Liebchens Haus.  
Da dacht' ich schon in meinem Wahne,  
Sie pfliff' den armen Flüchtling aus.

風が風見にたわむれる  
私のいとしい人の家の上で  
それを見たとき、狂気のなせるわざか、思ってしまったのだ  
風見は口笛を吹いて哀れなこの逃亡者を追い立てているのだと

Er hätt' es eher bemerken sollen,  
Des Hauses aufgestecktes Schild,  
So hatt' er nimmer suchen wollen  
Im Haus ein treues Frauenbild.

その男はもっと早くに気づくべきだったのだ  
この家に掲げられているこの標<sup>しるし</sup>に  
そうすればけっして探し求めようとはしなかったろうに  
この家に誠実な女性の鑑<sup>かがみ</sup>などを

Der Wind spielt drinnen mit den Herzen,  
Wie auf dem Dach, nur nicht so laut.  
Was fragen sie nach meinen Schmerzen?  
Ihr Kind ist eine reiche Braut.

風は家のなかでも人の気持ちをもてあそぶ  
これみよがしではないが、屋根の上と同じように  
あの家の人たちが私の心の痛みを気にかけることなどあろうか  
あそこの娘は富める花嫁なのだ

## 3. Gefror'ne Tränen

## 凍った涙

Gefrorne Tropfen fallen  
Von meinen Wangen ab;  
Ob es mir denn entgangen  
Daß ich geweinet hab' ?

凍った雫<sup>しずく</sup>が落ちてくる  
私の頬<sup>ほお</sup>をつたわって  
私は気がつかなかったというのか、  
自分が泣いていたことに？

Ei Tränen, meine Tränen,  
Und seid ihr gar so lau  
Daß ihr erstarrt zu Eise,  
Wie kühler Morgentau.

ああ涙よ、私の涙よ、  
よもやそんなにも生ぬるく  
凍って氷になってしまうとは  
冷えきった朝の露のように

Und dringt doch aus der Quelle

なのにおまえはそれでも湧き出てくる

Der Brust so glühend heiß,  
Als wolltet ihr zerschmelzen  
Des ganzen Winters Eis.

胸の奥底からこんなにも燃えるように熱く  
まるで溶かしたがっているかのように  
冬の氷をあますことなく

#### 4. Erstarrung

#### 凍結

Ich such' im Schnee vergebens  
Nach ihrer Tritte Spur,  
Wo sie an meinem Arme  
Durchstrich die grüne Flur.

雪のなかをむなしくも私は探している  
彼女が歩いた跡を  
彼女が私の腕にもたれて  
緑の野をさまよい歩いたところを

Ich will den Boden küssen  
Durchdringen Eis und Schnee  
Mit meinen heißen Tränen,  
Bis ich die Erde seh' .

雪の大地に口づけしたい  
雪も氷も貫き通してしまいたい  
私の熱い涙で  
地面が見えてくるまで

Wo find' ich eine Blüte,  
Wo find' ich grünes Gras?  
Die Blumen sind erstorben,  
Der Rasen sieht so blaß.

どこに行ったら花が見つかるのだろう  
どこに緑の草が見えるのだろう？  
花々は枯れはて  
芝生<sup>しばふ</sup>もこんなに色あせた

Soll denn kein Angedenken  
Ich nehmen mit von hier?  
Wenn meine Schmerzen schweigen,  
Wer sagt mir dann von ihr?

どんな思い出すら  
ここから持ち帰るわけにはいかないのか？  
私の心の痛みが口を閉ざし何も語らなくなれば  
いったい誰が私に彼女のことを語ってくれるのか？

Mein Herz ist wie erfroren,  
Kalt starrt ihr Bild darin:  
Schmilzt je das Herz mir wieder,  
Fließt auch ihr Bild dahin.

私の心は死んだも同然  
そのなかで彼女の姿が冷たく凍りついている  
またいつかこの心が溶け出せば  
彼女の姿もまた流れていってしまうだろう

#### 5. Der Lindenbaum

#### 菩提樹

Am Brunnen vor dem Tore,  
Da steht ein Lindenbaum:

かどべ  
門辺の泉のほとり  
そこにたたずむ一本の菩提樹

Ich träumt' in seinem Schatten So manchen süßen Traum.	その木陰で私は夢を見た あまたの甘い夢を
Ich schnitt in seine Rinde So manches liebe Wort; Es zog in Freud' und Leide Zu ihm mich immer fort.	私はその幹に刻みつけた あまたの愛のことばを 喜びにつけ、悲しみにつけその木は いつでも私を引き寄せた
Ich muß' auch heute wandern Vorbei in tiefer Nacht, Da hab' ich noch im Dunkel Die Augen zugemacht.	今日もまた旅ゆかねばならぬこの身 深い夜陰のなか、そのかたわらを通りすぎ 暗闇のなかでそっと 目を閉じてみた
Und seine Zweige rauschten, Als riefen sie mir zu: Komm' her zu mir, Geselle, Hier findest du deine Ruh' !	すると枝がざわざわとそよぐ まるで私をいざなうかのように 「私のところに来るがいい、友よ ここに君の安らぎがある」と
Die kalten Winde bliesen Mir grad' ins Angesicht, Der Hut flog mir vom Kopfe, Ich wendete mich nicht.	冷たい風が吹きつける 私の顔に真っ向から 帽子は頭から吹き飛ばされたが 私は振り向きはしなかった
Nun bin ich manche Stunde Entfernt von jenem Ort, Und immer hör' ich's rauschen: Du fändest Ruhe dort!	いまや私ははるか かの地から遠く離れたところにいる それでもなお木がざわめいて語りかけるのが聞こえるのだ 「あの木陰に君の安らぎがあるのに」と
6. Wasserflut	あふれ流れる水
Manche Trän' aus meinen Augen Ist gefallen in den Schnee; Seine kalten Flocken saugen Durstig ein das heiße Weh.	私の目から涙の滴 <sup>しずく</sup> がいくつか 雪のなかに落ちていった 冷たい雪のかけらが吸いこんでいく 渴いた砂のようにこの胸の熱い悲しみを

Wenn die Gräser sprossen wollen,  
Weht daher ein lauer Wind,  
Und das Eis zerspringt in Schollen,  
Und der weiche Schnee zerrinnt.

草が芽吹こうとするときになれば  
生あたたかい風がこちらへ吹きつけ  
氷は塊<sup>かたまり</sup>になって碎け散る  
そしてゆるんだ雪は流れ去る

Schnee, du weißt von meinem Sehnen:  
Sag', wohin doch geht dein Lauf?  
Folge nach nur meinen Tränen,  
Nimmt dich bald das Bächlein auf.

雪よ、おまえは私の想いを知っている、  
教えてくれ、おまえはどこに流れていくのだ？  
私の涙の跡をたどれば  
まもなく小川にたどり着く

Wirst mit ihm die Stadt durchziehen,  
Muntre Straßen ein und aus:  
Fühlst du meine Tränen glühen,  
Da ist meiner Liebsten Haus.

小川とともに町を通り抜け  
賑<sup>にぎ</sup>わう通りをあちこち行くすがら  
私の涙が熱くたぎるのを感じたならば、  
そこには私の最愛の人の家があるはずだ

## 7. Auf dem Flusse

## 流れの上で

Der du so lustig rauschtest,  
Du heller, wilder Fluß,  
Wie still bist du geworden,  
Gibst keinen Scheidegruß.

あんなにも楽しげにざわめきながら流れゆき  
かつては明るく奔放だった流れよ  
いまではなんて静かになってしまったことか  
別<sup>あいさつ</sup>れの挨拶もないままに

Mit harter, starrer Rinde  
Hast du dich überdeckt,  
Liegst kalt und unbeweglich  
Im Sande ausgestreckt.

堅<sup>い</sup>く凍てついた氷の皮で  
おまえは身を覆い  
冷たく身じろぎもせず横たわっている  
砂のなかに手足を伸ばして

In deine Decke grab'ich  
Mit einem spitzen Stein  
Den Namen meiner Liebsten  
Und Stund' und Tag hinein:

その氷の外皮に刻みこもう  
先の尖<sup>とが</sup>った石で  
最愛の人の名前と  
日付と時刻を

Den Tag des ersten Grußes,  
Den Tag, an dem ich ging,  
Um Nam' und Zahlen windet

はじめてことばを交わした日と  
私が立ち去った日と  
そしてその名前と数字のまわりを囲むのは

Sich ein zerbrochener Ring.

途中で切れたひとつの輪

Mein Herz, in diesem Bache

私の心よ、この小川に

Erkennst du nun dein Bild?

いま自分の姿が見えはしないか

Ob's unter seiner Rinde

川の氷の下でそれは

Wohl auch so reißend schwillt?

激しく<sup>あふ</sup>溢れはしないだろうか

## 8. Rückblick

## かえりみ

Es brennt mir unter beiden Sohlen,

両方の足の裏が燃えるように熱い

Tret' ich auch schon auf Eis und Schnee.

踏みつけているのは氷と雪なのに

Ich möcht' nicht wieder Atem holen,

ひと息つくのはもうよそう

Bis ich nicht mehr die Türme seh'.

町の塔が見えなくなるまでは

Hab' mich an jeden Stein gestoßen,

あわててどの石にも躓いてしまうほど

So eilt' ich zu der Stadt hinaus;

早くあの町から出ていきたかった

Die Krähen warfen Bäll' und Schloßen

カラスどもは雪のつぶてやあられのかけらを投げつける

Auf meinen Hut von jedem Haus.

どの家の屋根からも私の帽子めがけて

Wie anders hast du mich empfangen,

かつて私を迎えてくれたときはうって変わってしまった町

Du Stadt der Unbeständigkeit!

おまえはなんて移り気なことか

An deinen blanken Fenstern sangen

町の家々のまばゆい窓辺では歌っている

Die Lerch' und Nachtigall im Streit.

ひばりとナイチンゲールが競い争いながら

Die runden Lindenbäume blühten,

こんもりとした菩提樹には花が咲き

Die klaren Rinnen rauschten hell,

澄みきったせせらぎはさらさらと流れ

Und ach, zwei Mädchenaugen glühten!

そして、ああ、娘の双のひとみは輝いていた

Da war's geschehn um dich, Gesell!

若者よ、そこで君はすっかり心を奪われた

Kömmt mir der Tag in die Gedanken,

あの日のことが脳裏をよぎると

Möcht' ich noch einmal rückwärts sehn,

もういちどうしろを振り返りたくなる

Möcht' ich zurücke wieder wanken,

よろめきながらももういちど戻っていきたくみだ

Vor ihrem Hause stille stehn.

あの娘の家の前にそっと



## 9. Irrlicht

## 鬼火

In die tiefsten Felsengründe  
 Lockte mich ein Irrlicht hin:  
 Wie ich einen Ausgang finde,  
 Liegt nicht schwer mir in dem Sinn.

岩山の深い深い谷間へと  
 鬼火が私を引き寄せる  
 いったいどうやったら出口が見つかるのだろう？  
 でもそんなことは気にするまい

Bin gewohnt das Irregehen,  
 'S führt ja jeder Weg zum Ziel:  
 Unsre Freuden, Unsre Wehen,  
 Alles eines Irrlichts Spiel!

迷うことにもすっかり慣れた  
 どんな道を行こうともいつかは目的地にたどり着く  
 人の喜び、苦しみは  
 すべて鬼火のなせる業

Durch des Bergstroms trockne Rinnen  
 Wind' ich ruhig mich hinab—  
 Jeder Strom wird's Meer gewinnen,  
 Jedes Leiden auch sein Grab.

谷の流れの<sup>か</sup>涸れて乾いた跡をたどり  
 あわてずに蛇行しながら降りていこう  
 どんな流れもいつかは海にたどり着く  
 どんな苦しみもいつかはその墓にたどり着くように

## 10. Rast

## 休息

Nun merk' ich erst, wie müd' ich bin,  
 Da ich zur Ruh' mich lege;  
 Das Wandern hielt mich munter hin  
 Auf unwirtbarem Wege.

どんなに自分が疲れていたか、いまになってやっと気がついた  
 休もうと横になってみてはじめて、  
 さまよい歩いてもずっと元気にいられたのに  
 この愛想のない道のりですら

Die Füße frugen nicht nach Rast,  
 Es war zu kalt zum stehen,  
 Der Rücken fühlte keine Last,  
 Der Sturm half fort mich wehen.

脚も休もうとは言わなかった  
 立ち止まるには寒すぎたから  
 背中も荷物の重みを感じなかった  
 嵐のおかげで先へと吹かれていったから

In eines Köhlers engem Haus  
 Hab' Obdach ich gefunden;  
 Doch meine Glieder ruhn nicht aus:  
 So brennen ihre Wunden.

炭焼きの狭い小屋に  
 一夜の宿を見つけた  
 でも私の手足はゆっくりと休もうとはしない  
 それほどに傷がひりひりと痛むのだ

Auch du, mein Herz, in Kampf und Sturm

ああ、私の心よ、戦いにあっても嵐のなかでも

So wild und so verwegen,  
Fühlst in der Still' erst deinen Wurm  
Mit heißem Stich sich regen!

あれほど荒々しく不敵であったのに  
この静けさのなかでいまはじめて感じるのだ  
心の虫が熱く刺しながらうごめくのを

## 11. Frühlingstraum

## 春の夢

Ich träumte von bunten Blumen,  
So wie sie wohl blühen im Mai,  
Ich träumte von grünen Wiesen,  
Von lustigem Vogelgeschrei.

色とりどりに咲く花の夢を見た  
五月に咲き誇るような花々の夢を  
緑まぶしい野原の夢を見た  
楽し気な鳥たち<sup>さえず</sup>の囀りの夢を

Und als die Hähne krächten,  
Da ward mein Auge wach;  
Da war es kalt und finster,  
Es schrieen die Raben vom Dach.

すると雄鶏<sup>おんどり</sup>が時をつくり  
私は目がさめた  
あたりは寒く、薄暗く  
オオガラスが屋根で鳴いている

Doch an den Fensterscheiben  
Wer malte die Blätter da?  
Ihr lacht wohl über den Träumer,  
Der Blumen im Winter sah?

それにしても窓ガラスに  
葉の絵を描いたのは誰だろう？  
君たちは夢見た者を笑うことだろう  
真冬に花を見た者を

Ich träumte von Lieb' um Liebe,  
Von einer schönen Maid,  
Von Herzen und von Küssen,  
Von Wonne und Seligkeit.

愛の夢をたくさん見た  
ある美しい乙女の夢を  
抱擁<sup>ほうよう</sup>と口づけの夢を  
無上の喜びとしあわせの夢を

Und als die Hähne krächten,  
Da ward mein Herze wach;  
Nun sitz' ich hier alleine  
Und denke dem Traume nach.

しかしそこで雄鶏が時をつくり  
私の心も夢からさめた  
いま私はたったひとりでここに座り  
その夢の跡をたどっている

Die Augen schließ' ich wieder,  
Noch schlägt das Herz so warm.  
Wann grünt ihr Blätter am Fenster?  
Wann halt' ich mein Liebchen im Arm?

ふたたび目を閉じれば  
私の心はまだこんなに熱くときめいている  
窓辺の葉よ、いつになったらおまえたちは緑になるのだろう  
いつになったら私はこの腕に愛する人を抱きしめることができるのだろう？

## 12. Einsamkeit

## 孤独

Wie eine trübe Wolke  
Durch heitre Lüfte geht,  
Wenn in der Tanne Wipfel  
Ein mattes Lüftchen weht:

もの悲しい一片の雲が  
晴れやかな空を通り抜けていくがごとく  
もみの木の梢で<sup>こずえ</sup>  
けだるくかすかに風がそよぐとき

So zieh' ich meine Straße  
Dahin mit trägern Fuß,  
Durch helles, frohes Leben,  
Einsam und ohne Gruß.

私はみずからの道を  
重い足取りで進んでいく  
明るく楽しい世の中を通り抜けていく  
孤独なまま挨拶をかわすこともなく

Ach, daß die Luft so ruhig!  
Ach, daß die Welt so licht!  
Als noch die Stürme tobten,  
War ich so elend nicht.

ああ！ 大気がこんなにも穏やかだとは！  
ああ！ 世の中がこんなにも明るいとは！  
まだ嵐がたけり狂っていたときですら  
私はこれほどまでにみじめではなかったものを！

## 13. Die Post

## 郵便馬車

Von der Straße her ein Posthorn klingt.  
Was hat es, daß es so hoch aufspringt,  
Mein Herz?

通りから郵便馬車の鳴らすラッパが響く  
何があるのだろう、こんなに心が高鳴るのは  
私の心よ？

Die Post bringt keinen Brief für dich:  
Was drängst du denn so wunderbarlich,  
Mein Herz?

馬車はおまえに手紙など持ってくるはずがない  
それなのになぜ、こんなに奇妙に気持ちがせきたてられるのか  
私の心よ？

Nun ja, die Post kommt aus der Stadt,  
Wo ich ein liebes Liebchen hatt',  
Mein Herz!

そうだ、あの馬車はあの町からやってきたのだ  
かつて私に愛する人がいた町から  
私の心よ！

Willst wohl einmal hinübersehn,  
Und fragen, wie es dort mag gehn,  
Mein Herz?

ちょっとそこまで行って尋ねてみたいと思っているのではないか君は  
町の様子がどうなっているのかと  
私の心よ？

## 14. Der greise Kopf

## 霜雪の頭

Der Reif hatt' einen weißen Schein  
 Mir über's Haar gestreuet.  
 Da glaubt' ich schon ein Greis zu sein,  
 Und hab' mich sehr gefreuet.

<sup>しも</sup>霜がみせかけの白さを  
 私の髪にまき散らした  
 そこで私は自分が霜雪の老人になったのかと  
 とてもうれしくなった

Doch bald ist er hinweggetaut,  
 Hab' wieder schwarze Haare,  
 Daß mir's vor meiner Jugend graut—  
 Wie weit noch bis zur Bahre!

でもすぐに霜は<sup>と</sup>融け  
 また黒髪に戻った  
 自分の若さが恐ろしいとはなんてことだ—  
<sup>ひつぎ</sup>柩に入るまであとどれくらいあるのだろう！

Vom Abendrot zum Morgenlicht  
 Ward mancher Kopf zum Greise.  
 Wer glaubt's? Und meiner ward es nicht  
 Auf dieser ganzen Reise!

夕映えから朝の光がのぞくまでのあいだに  
 白髪頭になってしまう人もいるとは  
 誰が信じようか？ 私の頭は白くはならなかったのに  
 この旅に出てからずっと

## 15. Die Krähe

## カラス

Eine Krähe war mit mir  
 Aus der Stadt gezogen,  
 Ist bis heute für und für  
 Um mein Haupt geflogen.

一羽のカラスが私についてやってきた  
 あの町を出たときから  
 今日までずっと変わらずに  
 私の頭のまわりから離れずに飛びまわる

Krähe, wunderliches Tier,  
 Willst mich nicht verlassen?  
 Meinst wohl bald als Beute hier  
 Meinen Leib zu fassen?

カラスよ、おまえは奇妙な生きものだ  
 私のかたわらを離れようとは思わないのか？  
 ここでそのうち獲物として  
 私の<sup>しかばね</sup>屍をついばむつもりなのか？

Nun, es wird nicht weit mehr gehn  
 An dem Wanderstabe.  
 Krähe, lass mich endlich sehn  
 Treue bis zum Grabe!

さあ、もう先はこれ以上長くはあるまい  
 この杖に<sup>つえ</sup>すがって行く旅も  
 カラスよ、最後に誠意を見せてくれ  
 墓に入るまで見すでずについてくると

## 16. Letzte Hoffnung

## 最後の希み

Hie und da ist an den Bäumen  
Manches bunte Blatt zu sehn,  
Und ich bleibe vor den Bäumen  
Oftmals in Gedanken stehn.

木々にはここかしこに  
まだ色鮮やかな葉が何枚かのぞいている  
私はその木々の前に立ちどまり  
しばしば思いにふけるのだ

Schaue nach dem einen Blatte,  
Hänge meine Hoffnung dran;  
Spielt der Wind mit meinem Blatte,  
Zittr' ich, was ich zittern kann.

そこの一枚の葉に目がとまり  
その葉に私の希望を託すことにした  
風が私の葉をもてあそぶと  
私の体はありったけの力を振りしぼって震える

Ach, und fällt das Blatt zu Boden,  
Fällt mit ihm die Hoffnung ab,  
Fall' ich selber mit zu Boden,  
Wein' auf meiner Hoffnung Grab.

ああ、そしてその葉が地面に落ちるなら  
それとともに私の希望も落ちていく  
私もいっしょに地面に伏して  
私の希望を葬った墓の上で泣くことにしよう

## 17. Im Dorfe

## 村で

Es bellen die Hunde, es rasseln die Ketten.  
Es schlafen die Menschen in ihren Betten,  
Träumen sich Manches was sie nicht haben,  
Tun sich im Guten und Argen erlaben:

犬たちは吠え、鎖<sup>くさり</sup>がきしむ  
村人たちは寢床でまどろみ  
自分にはないあまたのものを夢見ては  
善くも悪くも心をなぐさめる

Und morgen früh ist Alles zerflossen.  
Je nun, sie haben ihr Teil genossen,  
Und hoffen, was sie noch übrig ließen,  
Doch wieder zu finden auf ihren Kissen.

しかし朝になればすべては消えている  
そうであっても皆それなりに楽しみはした  
そして夢のなかに残してきたものを  
枕の上にまた見つけようと思うのだ

Bellt mich nur fort, ihr wachen Hunde,  
Laßt mich nicht ruhn in der Schlummerstundel  
Ich bin zu Ende mit allen Träumen—  
Was will ich unter den Schläfern säumen?

眠らぬ犬たちよ、吠えてわたしを追いはらうがいい  
眠りのときもわたしを休ませるな  
すべての夢は見つくした  
眠り<sup>むさぼ</sup>を貪る者どものなかにどうしてこれ以上とどまろうか?



## 18. Der stürmische Morgen

## 嵐の朝

Wie hat der Sturm zerrissen  
Des Himmels graues Kleid!  
Die Wolkenfetzen flattern  
Umher im mattem Streit.

嵐がずたずたに切り裂いてしまった  
空の灰色の服を  
ちぎれた雲が舞いながら飛んでいる  
あちらこちらにひっそりとぶつかりながら

Und rote Feuerflammen  
Ziehn zwischen ihnen hin.  
Das nenn' ich einen Morgen  
So recht nach meinem Sinn!

そして真っ赤な炎が  
雲のあいだを移りゆく  
これこそ朝というにふさわしく  
こんなにも私の気持ちにそぐわしい

Mein Herz sieht an dem Himmel  
Gemalt sein eignes Bild—  
Es ist nichts als der Winter,  
Der Winter kalt und wild!

私の心には見えている  
空に描かれたみずからの姿が  
その姿はまさしく冬にほかならず  
寒く荒れはてた冬そのもの

## 19. Täuschung

## 惑わし

Ein Licht tanzt freundlich vor mir her;  
Ich folg' ihm nach die Kreuz und Quer;  
Ich folg' ihm gern und seh's ihm an,  
Daß es verlockt den Wandersmann.  
Ach, wer wie ich so elend ist,  
Gibt gern sich hin der bunten List,  
Die hinter Eis und Nacht und Graus  
Ihm weist ein helles, warmes Haus,  
Und eine liebe Seele drin—  
Nur Täuschung ist für mich Gewinn!

一筋の光が私の前を楽しげに踊っていく  
そのあとを私はあちこちとあてもなく追いかける  
喜んで追いかけてはいるが、私には見てわかっている  
その光が旅人を誘いこもうとしていることが  
ああ、私のようにみじめな者は  
喜んでその色とりどりの光に身をゆだねてしまうのだ  
氷と夜陰と恐怖のかなたで  
旅人に明るく暖かな家を  
そしてそのなかにいる愛すべき女性を見せてくれるから  
私が手中に収められるものは惑わしだけなのだ

## 20. Der Wegweiser

## 道しるべ

Was vermeid' ich denn die Wege,  
Wo die ander'n Wand'rer gehn,  
Suche mir versteckte Stege

なぜ私は避けるのだろうか  
他の旅人たちが通る道を  
なぜ人目につかない隠れた小<sup>こ</sup>径<sup>みち</sup>を探し

Durch verschneite Felsenhöhn?

雪に覆われた険しい<sup>けわ</sup>岩山を通っていくのだろう？

Habe ja doch nichts begangen,  
Daß ich Menschen sollte scheun—  
Welch ein törichtes Verlangen  
Treibt mich in die Wüstenein?

私は何もしたわけではない  
人を避けなければならないようなことを  
どのような愚かな思いゆえに  
私は荒地へと駆り立てられるのか

Weiser stehen auf den Wegen,  
Weisen auf die Städte zu,  
Und ich wandre sonder Maßen,  
Ohne Ruh', und suche Ruh'.

道にはさまざまな道しるべが立ち  
さまざまな町への方角を示している  
そして私はさすらうのだ、はてもなく  
休むことなく、しかし安らぎを求めながら

Einen Weiser seh' ich stehen  
Unverrückt vor meinem Blick;  
Eine Straße muß ich gehen,  
Die noch Keiner ging zurück.

一本の道しるべが立ちはだかる  
揺るぎもせずに私の目の前に  
私はある一筋の道を行かねばならない  
誰も帰ってきたことのない道を

## 21. Das Wirtshaus

## 宿屋

Auf einen Totenacker  
Hat mich mein Weg gebracht.  
Allhier will ich einkehren:  
Hab' ich bei mir gedacht.

とある墓地へと  
道が私を導いた  
ここに立ち寄りたいと  
ひそやかに思った

Ihr grünen Totenkränze  
Könnt wohl die Zeichen sein,  
Die müde Wanderer laden  
In's kühle Wirtshaus ein.

その緑の<sup>とむら</sup>吊いの花輪は  
きっと目印であるのだろう  
疲れきった旅人たちを  
冷たい宿屋へと招き入れるための

Sind denn in diesem Hause  
Die Kammern all' besetzt?  
Bin matt zum Niedersinken,  
Bin tödlich schwer verletzt.

いったいこの宿では  
部屋はぜんぶふさがっているというのか？  
私は倒れんばかりに疲れはてているのに  
死なんばかりに深い痛手を負っているというのに

O unbarmherz'ge Schenke,

あわれみのかけらもない宿屋よ、

Doch weisest du mich ab?

Nun weiter denn, nur weiter,

Mein treuer Wanderstab!

それでもおまえは私を追い返すのか?

ならば先を行こう、ただ先へと

さあ、忠実な私の旅の杖よ

## 22. Mut

## 勇氣

Fliegt der Schnee mir in's Gesicht,

Schüttl' ich ihn herunter.

Wenn mein Herz im Busen spricht,

Sing' ich hell und munter.

雪が顔に吹きつけてくるなら

そんなものは振りはらってやる

私の心が胸の内を明かすなら

明るく楽しく歌うまでだ

Höre nicht, was es mir sagt,

Habe keine Ohren,

Fühle nicht, was es mir klagt,

Klagen ist für Toren.

心が私に何を語りかけても耳を傾けたりしない

聞く耳などもつものか

心が私に何を訴えても同情などするものか

世迷いごとなど愚か者のすること

Lustig in die Welt hinein

Gegen Wind und Wetter!

Will kein Gott auf Erden sein,

Sind wir selber Götter!

陽気に世の中に繰り出すのだ

雨にも風にも負けず

神が地上にいないというなら

われわれ自身が神々になるまでのこと

## 23. Die Nebensonnen

## 幻の太陽

Drei Sonnen sah ich am Himmel stehn,

Hab' lang und fest sie angesehen;

Und sie auch standen da so stier,

Als wollten sie nicht weg von mir.

Ach, meine Sonnen seid ihr nicht!

Schaut Andern doch in's Angesicht!

Ja, neulich hatt' ich auch wohl drei:

Nun sind hinab die besten zwei.

Ging' nur die dritt' erst hinterdrein!

Im Dunkeln wird mir wohler sein.

私には空に三つの太陽が見えた

それを長いあいだ、じっと見つめていた

太陽もじっとそこから動かない

まるで私から離れていきたくないかのようだ

ああ、でもおまえたちは私の太陽ではない

他の連中の顔を照らすがいい

そうさ、私にも三つの太陽があった、ついこの前まで

いまではそのうちまともだった二つは沈んでしまった

三番目もあとを追って沈めばよいものを!

暗がりのなかのほうが私は安らかだろうに

## 24. Der Leiermann

## ライアーまわし

Drüben hinter'm Dorfe  
Steht ein Leiermann,  
Und mit starren Fingern  
Dreht er was er kann.

ずっと向こうの村のはずれに  
ひとりのライアーまわしが立っている  
凍えてかじかんだ指で  
まわせるだけライアーをまわしている

Barfuß auf dem Eise  
Wankt er hin und her;  
Und sein kleiner Teller  
Bleibt ihm immer leer.

氷の上を裸足で  
あちらこちらによろめきながら  
そのちっぽけな皿は  
ずっと空っぽのままだ

Keiner mag ihn hören,  
Keiner sieht ihn an;  
Und die Hunde knurren  
Um den alten Mann.

彼に耳を傾けようと思う者もなく  
彼に眼をとめる者もない  
犬どもがうなっているだけだ  
その老人を取り囲んで

Und er läßt es gehen  
Alles, wie es will,  
Dreht, und seine Leier  
Steht ihm nimmer still.

そして老人は放っておくだけだ  
すべてをならんとするがままにまかせて  
まわしつづけるそのライアーの音が  
彼の耳に鳴りやむことはない

Wunderlicher Alter,  
Soll ich mit dir gehn?  
Willst zu meinen Liedern  
Deine Leier drehn?

奇妙な老人よ、  
おまえといっしょに私も行こうか？  
私の歌にあわせて  
おまえのライアーをまわしてもらおうか？